

## トライアスロン参加者の満足要因の分析

○太田繁（聖徳大学） 太田あや子（国際武道大学） 大橋理恵（聖徳大学）  
野川春夫 萩裕美子（鹿屋体育大学） 松本耕二（鹿屋体育大学大学院）

トライアスロン参加者 満足要因

## 1. 目的

日本各地でさまざまなスポーツイベントが開催されている。特に、近年イベント開催が地域の活性化のエネルギー源として注目されており、この傾向はスポーツイベントにおいても顕著に現れてきているといわれている。一方、個人的レベルで見ると高度な情報化社会の進行などの社会構造の変化によって余暇時間へのニーズが高まり、スポーツ活動の需要も増加していくいえよう。このような状況の中で、今後スポーツイベントの需要はさらに高まり、その開催数も増加していくと考えられる。

スポーツイベントに関する研究は、イベントの運営面に関して参加者の視点に立ったものが少なく、その端緒は開かれたばかりであるといわれている。そこで本研究では、トライアスロン参加者の大会運営に対する満足度を明らかにすることによって今後の大会運営に対する基礎資料を得ることを目的とした。

## 2. 研究方法

1. 調査対象：1991年6月9日、伊豆大島で行われた「第3回全国ショートトライアスロン選手権大会（同学生選手権）」参加者112名（完走者94名、途中棄権者16名）であった。
2. 調査場所：大会のゴール地点である大島元町の長根浜公園にて質問し調査を実施した。
3. 調査期日：調査は1991年6月9日（日）7:00～14:00に実施した。
4. 調査方法：調査はゴール地点にゴールした完走者及びゴール地点に集まった途中棄権者112名を有意に抽出し、質問紙を持った8名の調査員が約10分間の直接面接を実施した（有効回収率100%）。
5. 調査内容：質問紙は、野川らのランニングイベントに関する先行研究（1991）をもとに作成した。質問項目は、対象者の個人的属性、大島トライアスロン大会への参加、大会運営に関する満足度、運動習慣などからなっている。なお、大会運営に関する満足度、及び再参加の希望の項目は4段階評定尺度法を用いた。
6. 分析方法：収集したデータは、項目別に単純集計を行った。

## 3. 結果と考察

1. 参加者が高い満足度を示していたのは、「参加費」、「ボランティアの対応」、「救護・医療サービス」、「コース全体」、「ランコース」であった。その中でも、特に満足度が高かったのは「ボランティアの対応」（99%）であった。野川らの先行研究においても同様の結果が示されており、地域のスポーツイベントにおけるボランティアの人間味あふれる対応がうかがえる。

2. 満足度が低かったのは「スタート時間」, 「ウォーミングアップ場」, 「トイレの設置場所と数」, 「スイムコース」であった。特に, 「スイムコース」については, 33%と最も満足度が低かった。スイムコースは, 大島元町港内を約700mの三角形に設定されたコースを2周するものであった。競技中は各コーナーを回るときに選手同士が衝突して混乱した。また, 干潮時の海面の高さを考慮しなかったために海面と上陸用の梯子との距離が離れてしまい, 役員が選手の手を引きあげてなければならなかった。また, 梯子の幅が狭く同時に上陸できる選手の数が限定されていた。このようなことが, 参加者の高い不満となってあらわれたものと考えられる。
3. 本イベントは離島での開催であったため, 原則として参加者を往復の船舶と大会本部指定の宿泊施設の専用ツアーを利用させた。これについては, 日程・交通・宿泊施設ともに80%以上の参加者が満足していた。
4. 本イベント参加者が, 大会運営上重要な側面としたのは「スイムコース」, と「コース全体」が20%で最も多く, 次いで「開催日」の17%であった。

注) 本調査では, 調査員として天野史子, 井村公美子, 鈴木和美各氏の協力を得た。

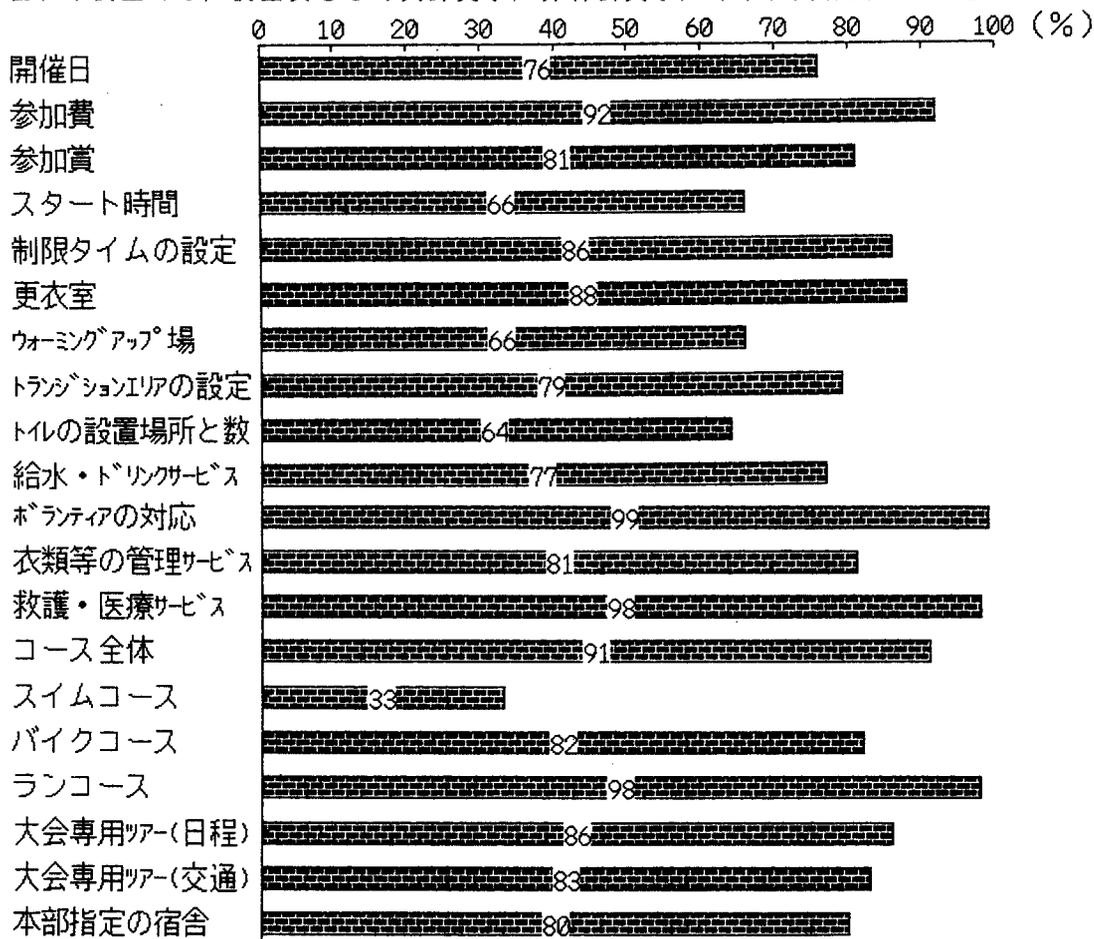


図1. 参加者の満足度